

夕陽会報



函館市縄文文化交流センターオープン

第205号



◆ 巻頭言 ◆

窓

副会長 絹野重治
(昭和40年卒)

私たちの同窓で、忘れられない偉大な先輩がおります。その方は、昭和五年卒で名古屋にお住まいだった萩原忠臣氏です。

誠に残念なことに今年の春、平成二十二年二月二五日に満百歳でお亡くなりになりました。夕陽会にとって大きな損失です。夕陽会九〇周年記念事業にも矍鑠として参加し、昨年までは、極めて健康で車の運転やゴルフを楽しむことが出来る程の健康状態でした。萩原氏は、函館師範学校を卒業後、現横浜国立大学工学部へ進まれました。創造力に富み、温厚で誠実、奥様と共に小さな電気製品修理工場からスタートし、自力で創設した萩原電気株式会社という大会社の社長職をお務めになつておられました。社長職を息子さんに譲つた後は、会長職に就き、お亡くなりになるまで現役で会長をされておられました。

本当に長い間、毎年同窓である夕陽会に絶大なる支援を続けていただくと共に、節目の周年記念の際には、なお一層のをご支援をいただいた方です。

「現在あるのは、私を育てていただいた母校のお陰」といつも口癖のようにおっしゃつておられました。そして、毎年のように母校がある函館を訪れ、昨年は、橋田会長さん方と歓談しながら、「私の命がある限り、夕陽会には毎年支援を続けます。」と本当にお元氣にお話されていただけに、お亡くなりになったのは、あまりにも突然のことです。信じられないというのが、私の心境です。萩原大先輩のご冥福を心からお祈り申し上げます。

函館に来る度に、同窓であり、同期生であつた元会長上田嘉一氏のお墓参りを欠かさずに行つていたこと、お会いする方々のために伊勢名物の「赤福」を両手にどっさり持つて飛行機から降りてくるお姿が強く脳裏に焼き付いています。ところで、私が萩原氏のことを知つたのは、昭和五年のことです。その年から私は、夕陽会の財政部員として仕事を

させていただきました。その仕事をする中でかなり以前から毎年、高額な寄付をしていただいている方がおいでになりました。当時は面識もなく、事務手続き上で、お名前だけしか知りませんでした。会費を納めていただく会員は、教員が多かつた時代だっただけに、すごい人もいろいろのだと思いつつ財政部の仕事をしておりました。やがて、お会いする機会があり、教員ではなく、大会社の社長さんだということが分かりました。

萩原氏の師範学校時代は、全寮制であつたため縦横の同窓のつながりが極めて強かつたと聞いています。私は、昭和四〇年北海道学芸大学の卒業です。私たちの頃は全寮制ではなく、各研究室ごとの活動が多かつたために同窓とか同期会意識はあまり強いものではありませんでした。しかし、時間が経つにつれ、同窓意識、同期意識が高まり、同期会を開くようになつて、今では二一回もの同期会を開催するようになっています。相互の親睦を一層深めるとともに、夕陽会の組織人として活躍、さらには、夕陽会の活動を支える会費を多くの同期の仲間が納入しています。

さて、北海道教育大学函館校は、二〇〇六年から「人間地域科学課程」として生まれ変わりました。さらに、二〇一三年からは、教育学部から国際地域創造学部（仮称）にするという情報もあります。同窓がますます多種多様な仕事に就き、全国各地に羽ばたいて活躍する時代を迎えるようになります。大学が教員養成課程の時代と大きく変わった現在、夕陽会を発展させるために全国に各支部を誕生させる必要があります。そして、その支部に卒業生がその地へ出向いていくことを知らせる必要があり、積極的に意識して、夕陽会に目を向けてくれる同窓が誕生するよう、新しい同窓個々にも夕陽会の存在価値を十分に熟知してもらふ必要があると思つています。



道教大函館校

「国際地域創造学部」に改組へ

十二年の開始を目指す

夕陽会会長 橋田恭一 (昭和39年卒)

北海道教育大学は十月二十二日(土) 函館校の教育学部人間地域科学課程を再編し、「国際地域創造学部(仮称)」に改組する構想案を発表した。来年五月末までに文部科学省の大学設置審議会に構想案を提出し、認められれば二〇一三年四月のスタートを目指すと発表した。

これは、同日札幌市内のホテルで開かれた、第十八回日本教育大学協会新課程連絡協議会の本年度国立大学協会改革シンポジウムで明らかにしたものである。

シンポジウムでは十三年四月から、函館校の教育学部人間地域科学課程を国際地域創造学部、岩見沢校の芸術課程、スポーツ教育課程を「芸術・スポーツ文化学部(仮称)」に再編、それぞれ専門分野の研究を深める方向性が示された。

函館校の新学部再編案は、国際地域創造学部・国際地域創造学科に国際協調コース、公共政策コース、地域環境科学コース、人間コミュニケーションコース(全て仮称)の四コースを設置。国際的な視野をもって地域を活性化させる人間育成を行う目的で、語学教育や教養・専門科目を充実し、地域学やコミュニケーションに関わる科目を取り入れる。改組の理由として、同大学の蛇穴理事は「現在の課程では社会が求める人材育成ができていない。教育大学で培った専門知識を研究し、他大学にはないカリキュラムを作る必要がある」とする。

函館校はまた、今年五月から公立はこだて未来大と教育国際化検討委員会を立ち上げ、国際交流プロジェクトを進める

新たな取り組みも始めている。(以上、函館新聞から抜粋掲載)

こうした大学本部の発表内容は、これまでも夕陽会本部役員会や本部総会、各支部総会・懇親会等でその一部をお知らせしてきたが、この度の正式発表を受けて、その全容を掲載したところである。

こうした北海道教育大学の動きに対して、夕陽会本部としては以下の内容で大学本部・函館校を通して文部科学省へ要望活動を継続していきたいと考えている。

一、新学部は、現在の人間地域科学課程を発展的に移行させて国際的な視野をもち地域を活性化させる人材育成を目指すことになる。大学の一層の取組を期待したい。

二、多様な人材育成を目指す中で、教職を目指す学生・高校生のニーズに合わせてこれまでも取得可能であった幼稚園・小学校と中学校・高等学校(国語・数学・社会・理科・外国語)・特別支援学校の教員免許状取得を引き続き可能とすること。

三、教育学部の冠がはずれることから今後、函館校の附属四校園(幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校)の存続が危惧される。新学部移行後も附属四校園を継続して設置すること。

以上の事項については、北海道教育委員会・渡島市町教育委員会教育長会・函館市・北斗市等に協力支援を求め、大学本部・函館校を通して文部科学省へ強力に要望活動を継続していくこととする。

受賞(章)おめでとうございます

*瑞宝双光章

渡部 智夫 氏 昭和30年卒

北斗市本町468の9

岩村 吉男 氏 昭和31年卒

森町蛸谷町324

鈴木 幸治 氏 昭和31年卒

札幌市東区伏古9条2丁目1の8

清野 弘子 氏 昭和39年卒

函館市日吉町1丁目7の6

*函館市文化団体協議会 白鳳章

信田 誠 氏 昭和35年卒

函館市松陰町31の5

安保 勝順 氏 昭和44年卒

函館市美原1の46の14

*函館市文化団体協議会 青麟章

磯波 理恵 氏 平成14年卒

函館市立恵山中学校教諭

*公益財団法人 日本陸上競技連盟 秩父宮章

岡部 壽一 氏 昭和40年卒

北斗市久根別4の41の10

*公益財団法人 日本郵趣協会 第三一回 郵趣活動賞

渡利 正義 氏 昭和39年卒

函館市中道2丁目2の18

*第六十五回北海道新聞文化賞 社会部門

浅利 政俊 氏 昭和28年卒

七飯町字緑町16の4



東北大震災に伴う義援金活動の報告(二)

幹事長 奥崎崎敏崎之
(昭和60年卒)
北海道教育大学附属函館中学校副校長



復興・始まりと終わりの見えない不安

宮城支部 嶋田 晋
(昭和44年卒)

第二〇四号の会報で、この度の東北大震災に伴う義援金の七月時点までの活動について御報告申し上げておりました。その後、八月から九月にかけて、本部より、宮城の同窓会員に向け、お寄せいただいた義援金をお渡しして参りましたので、前号に引き続き、その後について紙面をお借りして御報告いたします。宮城の同窓会員につきましては現在、支部の機能が停止していることから、本部より六月上旬に個人宛四十九通、勤め先宛百八十二通の往復葉書を発送し、その所在や安否について確認してまいりました。御地の混乱した状況なども考慮し、八月の中旬までご返事を待ち、最終的に個人、勤め先合わせて八十一通の返信を頂きました。

勤め先に送った葉書の中には、二度職場を転送され同窓生の元に届き、無事であることが確認できたものなど、広く宮城県の皆様のご厚情によりたどり着くことができたものが何通もございました。返信いただいた葉書の通信欄に記された近況や感謝の言葉などを通して、宮城の地にあつて日々奮闘される同窓生のお姿を垣間見、復興の道が未だ緒に就いたばかりであるということを改めて感じさせられました。

全道・全国の同窓会員からお寄せいただいた義援金をどのような形でお届けすることが最も気持ちを通じることかと思案し、お見舞いを申し述べる橋田会長からの文章に加え、会報第二〇四号と、通信欄にて返信いただいた宮城の地で頑張る同窓生の近況の抜粋を義援金に添え、お送りすることにいたしました。

現金書留の封筒では、こうした書類は入りきらないため、義援金を郵便為替に替え、A4の入る封筒を簡易書留として八月三十日に送らせていただきました。義援金の内訳については、宮城の支部には先般百五万円を配分することになっておりまして、岩手支部とも連絡を

取り合いながら、ご家族の方の御逝去五万円(二件)、家屋の全壊三万円(五件)、家屋の半壊・車の流出二万円(八件)、その他の被害・海岸部の自治体に居住一万円(八十件)となる内訳で発送させていただきました。(この他に、為替への手数料や簡易書留の郵送費などがかかりました。)本来であれば、宮城と岩手の支部での配分の基準について齟齬の無いように取り運ぶのが筋なのですが、本部事務局の、学校という本務を抱えた中での取組にも限界があり、こうした形になりましたことを何卒ご理解いただきたく存じます。最後に、宮城から頂いたお手紙の掲載を持って、この度の会員各位の御厚情への感謝の言葉に代えさせていただきます。

「私は、宮城県の〇〇市の自宅が被害に遭い全壊し、現在引っ越し中の仮住まいを余儀なくされています。勤務校も三ヶ月近く避難所となり、二学期が始まりようやく公私ともに以前の生活に戻りつつあります。」

四月に被害状況の調査の葉書が職場に届き、卒業してから二十数年も経つのに心配し、近況を尋ねていただいたことに大変驚きました。あの時は、公私ともに大変な時期で、被害状況を知らせるだけで精一杯でした。

この度、義援金と会報が届きました。本当にありがとうございます。北教大の卒業生であること誇らしく思うとともに大変うれしく思いました。義援金は、生活再建のために大切に使用させていただきます。また、同期の友人や先輩、後輩からも温かいメールや手紙、義援金等をいただきました。本当に言葉に言い表せないくらい感謝しております。

皆様から頂いた温かい気持ちを忘れず、少しづつ生活を立て直し、子どもたちの成長を手助けしていきたいと思えます。」

震災から半年が経って、やつとウオーキングに出かける気分になった。未だに道路は、至る所うねりと亀裂が数多く見られ、思ったより大きな口を空けていたのには驚いた。山道に沿って、所々に薄紫色の釣鐘人参や吾亦紅の野草が去年と変わらなく咲いていることに感動した。被災した人々のことを想うと、感動している自分に少し後ろめたさを覚えた。

三月十一日二時四十六分からの、M9の四分間の揺れは非常に長く感じた。何事もなかった日常生活を、一瞬にして、すべて失うこととなった。想像を遡に超える大津波被害の凄まじさに声も出ないくらいの衝撃を受け、そして、余震が続くたびに体が最初に反応した。電気・水道・ガスが停止していても、自宅で寝られるだけ恵まれていると言いかせ、不安解消に努めた。

次の日から、神社の湧き水汲み、食料品の買い出し等、何処に行っても長蛇の列。品薄もあり三、四時間並ぶのはあたりまえとなつていった。実際に三月十一日の震度六強でのライフライン停止より、四月七日の震度六弱の余震による二度目のライフライン停止の方が長くて辛かった。やれることが決まっていたのに何故か心にゆとりが持てなかった。

震災後の三日目の夜、不安と寒さで震えながら初めて見たテレビ映像でもそうであつたように、七ヶ月後の今見る映像で何度も衝撃を受けている。

絶望感で心を締め付けられた被災者を支えたものは何だったのだろうか。未だに瓦礫が何処かに移動しただけで片づいてはいない。一階が津波にえぐり取られ辛うじて建っているブルーシートに覆われている家々。残っている家の土台を緑が覆い隠し、其処に人々の暮らしが在ったことが感じられないほど伸びた雑草。見慣れているはずの家並を思い出せないほど変わり果てた被災地と、被害が無かった地域との空気の違い。そして、福島原発事故。復興までどれだけの長い時間と知恵が必要なのだろうか。

最近感じる。傷は癒えていないが笑顔が戻って来ている。人々の力を借りながら、立ち上がろうとする息づかいが感じられる。復興にはほど遠いが、これからが本当の始まりなのかも知れない。例年なら、早めの冬支度をしているころなのに。

今回の震災にあたり、直接夕陽会本部からの連絡やお見舞を頂いたことには、宮城県在住の卒業生にとつて、驚きとともに勇気や励ましに成りました。そして、何よりも、ご支援頂いた夕陽会々員の皆様の暖かい心遣いに、心から感謝と御礼を申し上げます。



被災地の夕陽会員からの感謝のお手紙

[illegible]

本日(三)地蔵菩薩受取りしに
甘縁が十時(即ち夜心)才路射にしき
其時、時々今も通して、速く廻りに住むを
変じたり自然災害に遇してのふれづには、
早く立ち上りています。

ある時、半平を呼んで、「おつていませう」
 長男は、大に地獄へ（多分妙、愛度も強）一掃度
 して、ついで、今宵、（南好（子））水達（子）の
 アーティスト、ゴッティン不足と、志から前田
 川用へ、金持の理情に成るに、ヤシで、寒め、に、
 られられまふ。

今はお歸りの命懸けも少く、
朱野おはすまい。 2月19日の郵便より

完成には功なり。同窓生は正作でいる。ウー
 を抑えて法難し。金くす。金回りの子救を思ひます
 甲の求む思ひます
 現役を退き。十。あり。もう。う。若ければ
 片段に。は。前。う。思ひます
 合います。く。の。後。と。同窓会。の。皆。の。健康
 を。祈。ひ。て。お。す。す。

$$\frac{9}{10}$$

夜歸

夕陽金線

1921年

[illegible]

宮城東仙台中泉寺住持
西二十日十五十一
北島 智恵(日野田)

上海教育出版社分馆经售

このたびは、お忙しい中、寄附金などのお礼をいまだにありがとうございます。誠にありがとうございました。また、お礼状をいまだに送って、たいへんお詫言しております。

震災後のこのころから、4月に避難先を異動しました。避難先、3月の半ばまでは親と同居していましたが、4月からはお義母様でほとんどが使用できない状態となりました。その後、子どもたちは2人別々に別、独り不慣れな学校生活を送って参りましたが、サットとアノハの避難先が同じでした。豊橋市から金沢がひとつ距離の下で通けるようになりました。また、自立した気風が有って、素、親を頼りませんが自らを助けることができるようになりました。そして、8月11日の東日本震災で亡くなったお母様の忌日、少しずつお慰めして参りましたが通じているところまで。

夕陽の赤い空を、こもぬいした雲がのびのびと泳いでいた。雲
影が静かに流れて、お母さんの顔を照らしていた。

草履 23 厘米 4 包

廣東省立嘉應州中學 加編 第四頁

[illegible]

衡天
海火地
壹既日指
朝起七

品定牌 新加坡 1980
品定 日本中子学社
我提全以利国为心
路以超心一教子也
1980年1月1日 会章
雪成录

将野一裁

[illegible]

(寄せられた礼状のほんの一部ですが、掲載させていただきました。)

支部の歴史をふりかえって



胆振連合支部の歴史を振り返って

胆振連合支部長 中澤 学
(昭和51年卒 伊達市立東小学校長)

胆振管内には、室蘭支部、苫小牧支部、胆振連合支部の三支部があります。胆振連合支部は、その名の通り胆振管内の室蘭市、苫小牧市を除く二市七町の夕陽会の連合体です。各市町にはそれぞれ夕陽会があり、独自の活動をしています。連合支部としての活動も進めています。

今回、胆振連合支部の歴史についての寄稿の依頼を受け、困ったというのが正直な感想でした。というのは、私の手元にはほとんど資料が無く、唯一あるのが歴代の役員名簿だけだったからです。この名簿は、私が幹事長をしていた六年前に第二十四代支部長伊藤潔氏（昭和三十年卒）からいただいたものです。この名簿を頼りに先輩諸氏から伺った内容を整理し、現在の支部の様子ともからめていくつか紹介したいと思います。内容に事実と異なることがあればご指摘頂ければ幸いです。

胆振連合支部は、戦後間もない昭和二十二年に結成されています。初代支部長は多原咲次郎氏（大正八年卒）です。その後、谷山雄蔵氏（大正八年卒）、根本元貞氏（大正十年卒）、藤原純司氏（大正十一年卒）と続いています。この頃で特筆されるのは守屋浩氏（昭和二十年卒）が昭和二十八年から八年間幹事長をしておられることです。ですから、胆振連合支部は六十四年の歴史があることになり

ます。昭和二十年代から三十年代前半はあまり活動が活発ではなかったようです。当時、胆振管内にいる夕陽会員は、駅から離れた交通の便の良くない町の学校に勤める先生が多く、そのこともその後の胆振連合支部の活動のエネルギー源となつたと伺っています。

胆振連合支部の発展に大きく力を発揮された方は横山勉氏（昭和四年卒）です。横山氏は、昭和三十六年から幹事長を八年間、支部長を一年間されています。更に退職されてからも名誉支部長を十年間されています。その中で組織の整備・拡充と活動の充実を図られました。私も何度かお会いしたことがありますが、昔の武士を思い起こさせる凛とした風貌の方でした。「夕陽の精神は反骨である」という言葉が今でも耳に残っていますし、挨拶がとても長かったことも覚えています。横山氏は、その後、伊達市長もされて伊達市の名誉市民にもなられました。

胆振連合支部は、毎月一月に大懇親会を開催しています。この時には、本部からも役員の方に参加していただき、現職OBも含め、大いに交流と親睦を深めています。第一回の大懇親会は、昭和三十年頃、室蘭市の大谷高校で開かれたそうです。これは、室蘭市が胆振の中央に近く交通の便が良かったことと、大谷高校の校長先生が園家氏で、夕陽の先輩で

あったための計らいであったそうです。その後、大懇親会は、室蘭市中央町のそば屋「よしざき」で数回開かれました。更に、胆振管内は東西に長いので、東部と西部の隔年開催の時期もありました。東部開催の年は苫小牧駅前の「わたなべ食堂」で、西部開催の年は洞爺湖温泉の「光風園」で行われました。その後、今は無くなった室蘭市の丸井デパートの裏にあったホテル（名前は確かでない）、同じく室蘭市の「ホテル・サンルート」と会場を変え、この十年程は室蘭市の「蓬峽殿」で行っています。最近の様子ですが、会場には高橋達夫氏（昭和五十二年卒）揮毫の寮歌と夕陽賛歌の歌詞が大々的に張られ雰囲気盛り上げています。その中で勇退される会員には、長年の功績に込めるべく本人が希望する寮歌の一節を書きとして記念に贈っています。また、新入会員は今後の抱負を述べ、会場から先輩達の檄が飛び交っています。また、昨年は同窓の士気を高めるべく胆振連合支部独自の法被を新調しました。そして、大懇親会の最後には、阿部英幸氏（昭和二十九年卒）の音頭で盛大なエールと拍手を行うのが慣例となっています。阿部氏は、大懇親会に昭和三十年から皆勤で出席され、以来毎年拍手とエールの音頭をとっておられるとのこと、実に五十六年も続けて下さっています。今は廃線となった旧胆振線をモチーフにユーモアたっぷりの語りに会場は和やかな雰囲気になっています。

胆振連合支部の役員会ですが、昭和四十年代は、室蘭市浜町のそば屋で行われていたそうです。（店の名前は定かでない）当時は期別幹事というのがある、その人たちが役員会に出席していたそうです。兵揃いの校長達の喧々囂々とした

やり取りを身を細めて聞いていたそうです。現在は、五月と十一月に東室蘭の「大将」という寿司屋で行っています。三階に会議のできる部屋があり、そこで役員会を行った後は二階の部屋で懇親会を行っています。

胆振連合支部では明日の胆振の教育を担う人材を育成するために「学校経営セミナー」という研修会を続けています。このセミナーは、室蘭支部、苫小牧支部と合同で行っています。元々は三支部が別々に行っていたそうですが、昭和五十九年頃に合同で開催するようになったそうです。現在は、年に四回、白老町の「ホテルいづみ」を会場に行っています。今年度は、一般、現職会員合わせて五十四名、スタッフ十六名で運営しています。

胆振連合支部の特色ある活動として「若者の集い」というのがあります。これは昭和六十二年、当時組織部の役員をしていた工藤昭夫氏（昭和三十三年卒）の発案で、若い会員の交流を図ろうというところから始まりました。三十四歳以下の会員二十数名が、一泊二日の日程で白老町の「白泉閣」を会場に研修と交流を行いました。その時の講師の一人が前田富士也氏（昭和二十五年卒）で、切り絵を教えていただきました。その後は、形態を変え、胆振西部、中部、東部の三地区に分け、地区ごとに開催していますが、この活動も始まってから二十五年になります。

以上、つたない文章で紙面を埋めさせていただきました。胆振連合支部の先輩諸氏からお叱りを受けそうですので、この紙面を借りて先にお詫びしておきます。

社会に活躍する同窓



人との繋がりを大切にして

（株）京王観光札幌支店 白崎 雄己
（平成22年卒）

「社会人」として社会に出て働くようになってから、瞬く間に一年と半年が過ぎてしまいました。そんな私の長いように短い社会人になってからの一年半を、社会人になるまでのあつという間の四年間から振り返ろうと思います。

私の大学生活は「新課程第一期生」として始まりました。大学として大きな変化を迎えたであろうこの年に、私は何の意識もなく入学しました。環境科学専攻に属し、教員免許取得を漠然とした目標に掲げ、授業を取り始めました。日々友人と絆を深め、先輩・教職員の方々と人間関係の中から、人と触れ合うことの難しさ、楽しさを学び、四年間続けたアルバイト経験から、働くことの難しさ、自分の力不足さ、義理・人情・根性を学びました。

今思うと、勉強はほどほどに、無我夢中で社会勉強をしてきた四年間だったと思います。その社会勉強の大半をさせてくれたのが、入学当初から参加していた「行事運営委員会」というサークルでした。名前の通り、学校行事を企画・運営する集団です。これには様々な人間が集まり、学生以外の多くの方々からの協力を得て、時にはぶつかりながらも、全員で一つの目標に向かって、成功を信じて走り抜けてきました。素敵な出会いもありました。そこで出会った仲間と夜な夜な語りあひながら見えてきた、自分のな

りたい将来像は、教員ではなく、民間企業、特に営業でバリバリ働く営業マンでした。

三年生にもなると、それぞれの進路に進むための準備で忙しくなりながらも夜な夜な語り合い、お互いが別々の人生に進んでいくことを実感していく寂しい毎日でもありました。

そんな就職活動を経て、内定をもらったのが現在の会社（旅行会社）でした。皮肉にも、金輪際関わることのないと思っていた教育の分野にも関わる仕事でした。就職してみると、想像絶する厳しい世界でした。失敗や、落ち込むことも多く、楽しかった大学生活を思い出しては溜息をつくような日もありましたが、遠く離れた別々の道を歩む仲間も、皆苦労している話を聞くと、もう少しふんばろうと根性が沸きました。そんな毎日を過ごし、久々に再会する仲間と語り合う夜は、これもまた格別でした。

そんな経験を経た今、少し成長した自分になれていると感じます。今は、大学関係・法人・小学校のお客様を持ち、出来ないなりににも必死に駆けずり回る毎日、小学校の修学旅行の添乗で子ども達と触れ合う時に、今の仕事にもの凄くやりがいを感じる日々を過ごしております。教育大学で培った人との繋がりを大切にしながら、これからも頑張っていきたいと思います。ご協力よろしくお願い致します！



新たなスタート

富山県小矢部市立蟹谷小学校教諭 山本 真裕
（平成23年卒）

（平成二十三年四月。富山県で私の教師生活は始まりました。約半年ほど経った現在もまだまだ分からないことばかりで、先輩に教える乞う日々です。

教師という仕事に興味を持ったのは、小学生の頃でした。六年生の時に隣のクラスが、学級崩壊状態になってしまいました。その時に私のクラスの担任の先生は、いつもクラスにいてくださいました。当たり前のことかもしれませんが、当時の私にとっては大変安心できることでした。

北海道教育大学函館校を選んだのは、学べるのが教育だけではなくたからでした。人間地域科学課程という新課程は、大変魅力的なものでした。実際、大学の四年間は大変充実していました。

平成二十三年三月。卒業を目前に控えていたころ、東日本大震災が発生しました。日を追うごとにその被害の凄まじさを感じていました。

そんな天災の年に教師になった私は、改めて、自分が教師に興味を持つきつかけとなった先生の安心感の大切さを痛感しました。

私は、常に笑顔で子どもたちと接すること、わかりやすい授業づくりを通して、子どもとの信頼関係を築くとともに、子どもたちにとって安心できるクラス作りを心掛けてきました。

最初は、わからないことだらけで、ただただ仕事をこなすことで精一杯でした。

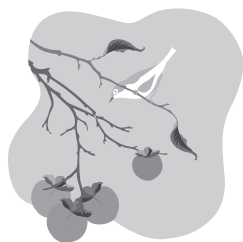
もちろん、そんな状態で良い授業はできませんでした。しかし、周りの先生方や同期の先生方に助言やアドバイスを頂いたり、話を聞いてもらったりすることで少しずつ、周りのことが見えるようになってきました。特に大学時代の友人で現在先生になっている方の言葉が印象に残っています。

「研究授業の準備が忙しくて、子どもと関わる時間が減って、これじゃ本末転倒だなって思った。」

私は、この言葉にハッとさせられました。教材研究や事務作業ももちろん必要で大変重要なことです。特に教材研究は、教師と児童を繋ぐ場である授業の礎です。ただ、その忙しさを理由に子どもとの関わりが犠牲になってしまっているのではないかと感じたのです。これでは、まさに本末転倒ではありませんか。

私は、朝のちよつとした時間や休み時間にもできるだけ教室にいるように心掛けています。子どもと関わる時間を多くすることで、安心感を与えられると考えているからです。

まだまだ、半人前です。いつかは先輩方のような教師になれるよう、驕ることなく、精進していきたいです。





只今母校(函館師範・第二師範・ 学芸大・教育大)陸上部史を編纂中

編集委員長 青 柳 史 匡
(昭和42年卒)

編纂の思い

中学生時代に陸上部に所属し苦楽を共にしながら記録に挑戦した日々は、青春時代の貴重な財産となっている。部活が縁で先輩や後輩との交流も得難いものがある。部員の中には卒業後も選手生活を続けた方、指導者として立派に活躍されている方もおられる。陸上競技団体の記念誌や個人編纂の記録集には、函館師範、学芸大、函教大時代に活躍された方々が載っている。陸上界で実績が認められ、各種栄章に輝いた方も多数おられる。大先輩は函館師範の陸上部の強さをよく口にされていた。

一方で、我が陸上部はいつ創設され、どの時代にどなたが所属され、どんな戦績や足跡を残してきたのか等、部の歴史をまとめた資料を目にしたことはなかった。先人や仲間との「青春の証」を記録に留め置くことなく、埋没させてしまつてはいけない。

母校は間もなく開学百年になろうとしている。陸上部の大切な語り部となる大先輩が鬼籍に入られて行く中、遅すぎた観はあるが、今年七月に陸上部OB有志で編集委員会を立ち上げ、創部から現在に至る部の足跡を調査し、部史として編纂・発刊する運びとなった。

完成の暁には、先輩と後輩の新たな縦糸と同期の横糸が編まれ、絆の縁を再確認・再認識できればと願っている。

また、この取組は、母校や同窓会(夕陽会)にとつても意義あるものと確信している。

陽会)にとつても意義あるものと確信している。

編集委員会構成(敬称略)

相談役

鈴木 博 (元陸上部顧問・元教授)

米谷 元捷 (元陸上部顧問・元教授)

内藤 一志 (現陸上部顧問・現教授)

顧問 斎藤 文雄 (昭和三十四年卒・札幌)

岡本 守 (昭和三十六年卒・函館)

小川 智博 (昭和三十六年卒・七飯)

岡部 壽一 (昭和四十年卒・北斗)

委員長 青柳 史匡 (昭和四十二年卒・札幌)

副委員長 増野 芳幸 (昭和四十八年卒・北斗)

井上 智雄 (昭和五十八年卒・札幌)

委員 鶴 宗三郎 (昭和四十七年卒・函館)

海野 厚二 (昭和五十八年卒・北斗)

佐竹 聡 (昭和五十八年卒・北斗)

林 功 (昭和六十年卒・札幌)

荒川 芳央 (昭和六十一年卒・札幌)

部史の主な内容(予定)

○顧問の回顧・回想

○部の沿革(創部の北海道函館師範学校時代から現在までの九十有余年)

○全国大会・北海道大会等で活躍した選手(全国大会出場者、北海道大会優勝者)

○卒業後も活躍したOB

○栄章に輝く夕陽の同窓生

(部員はもとより、部に所属していなくても陸上界に貢献して各種栄章に輝いた同窓生を掲載)

○OB各位の回顧・回想(思い出綴り)

多くの方々からの玉稿を掲載

○記録編

函教大陸上部種目別歴代二十傑

北海道中等大会、函館市内・地区中等大会、北海道学生対校選手権、北海道地区大学体育大会、北海道学生選手権、道南陸上選手権、その他の大会(全日本学生選手権、全国教育系大会、北日本選手権、北海道選手権等)の入賞者

○部員名簿(大正七年卒一回生から現在まで。中途退部者を含む。)

高く厚い歴史の壁
九十有余年間の歴史を調査しているが、失われたものが多すぎる。部の沿革や当時の部員、各種大会や戦績を探るため、師範学校時代の手掛かりを夕陽記念館や函館校図書館、函館中央図書館等に求め、師範創立二十五誌等の記念誌、師範校友会発行の「師範学校誌」「師範学報」「白一線」卒業アルバム等々で探っている。また、函館中央図書館のマイクロフィルムで所蔵されている当時の「函館日々新聞」、「函館新聞」等は貴重な情報源になっている。大先輩からの聞き取りも強化したい。

創部は大正四年、名称は「徒歩部」「オリンピック部」「競技部」「陸上競技部」と変遷を辿ったことが分かってきた。戦中・終戦・戦後の動乱期も厚い壁として立ちはたかっている。戦後の各種大会や戦績は、北海道陸協や道南陸協等が発行している記念誌、個人の著書、当時の

の各社新聞記事、函教大陸上部記録集等から鋭意収集に励んでいる。各大会の入賞者を可能な限り探り当て、記録編に掲載しよう心がけているが、欠落も多く一喜一憂の日々が続いている。

OB各位へお願い

お手元に各種大会の決勝記録一覧、プログラム(記録記入)、大会記録スクラップ類はございませんか。(特に昭和五十二年から平成元年の女子、平成三年から五年と七年から十一年の男女)

大会の様子や仲間と撮った写真をご提供ください。発刊は平成二十四年度内を目指しています。ご理解とご協力、ご支援をお願いします。



昭和13年の徒歩部(卒業アルバムより)

問合せ及び連絡先

編集委員長 青柳史匡(ふみただ)

〒002-8008

札幌市北区太平8条5丁目5-7

電話・FAX 011-772-8532



第九回夕陽書道展を終えて

文化部長 中村 吉 秀
(昭和54年卒 函館市立桐花中学校長)

「書には無限の魅力がある。多くの方に作品をみて楽しんでもらえれば」と出品者の思いが込められた素晴らしい作品が揃った「第九回夕陽書道展」が函館市芸術ホールギャラリーを会場に、九月十七日から二十二日までの六日間の日程で開催され、たくさんの方の会員や一般来場者をお迎えしました。

昭和五十三年の第一回から、教育や文化活動にたずさわる多くの会員の参加のもと、音楽や美術とともに「創造し行動する夕陽会」を旗印に活動が続けてきました。

今回は、昭和二十年卒から平成十六年卒までの全国・全道で活躍されている七十一人が出展。作品は、漢字・近代詩文・書・仮名・墨象・篆刻等、書の各ジャンルが揃い、伝統的な古典の書から現代アートの書ありと、幅広く、そして個性豊かに、趣向を凝らした意欲作ばかりでした。見るものに心地よいリズムを感じさせ美しい空間を醸し出している作品、潤筆と渴筆からの墨量の変化に力強さや躍動感そして立体感を感じさせてくれる作品、額装の工夫や詩文にこだわった作品等々、日頃研鑽を積まれてきた個々の書活動の充実ぶりがうかがわれ、出品者それぞれの書に対する熱い思いが会場に溢れ観客を魅了しました。

更に、顧問出品として、旧母校教官の永田青雲、須田廉亭の二氏の作品が中央に飾られ会場に華を添えてくださいまし

た。そして、特別出品として、橋田恭一 夕陽会会長、中村吉秀文化部長の作品も紹介されました。ゆつたりとした会場に恵まれこともあり、大作が多く見応えのある素晴らしい書道展を開催することができました。

期間中、約六百人の来場者があり、道内各地から卒業生の方々も見えられ、旧交を温め親しく会話をされたり、出品者から制作秘話の説明を受けたりと、和やかな雰囲気会場を包んでくれました。

この度の書道展を通して、先輩・後輩、年齢を問わず、志同じく書を愛する方々が制作活動を通して自己を見つめ、互いに厳しく、そして認め高め合っている姿に人としての豊かさ、奥深さを強く感じることができました。

また、運営についても、佐藤洋子実行委員長（石崎小学校長）をはじめとする、実行委員の方々の見事なチームワークと行動力で順調に進めることができました。和気藹々と進められた「第九回夕陽書道展」を無事成功裏に終えることができたことを嬉しく思っております。

終わりになりますが、実行委員会の皆さまとそれを支える諸先輩、そして何かとお世話いただいた橋田会長をはじめ、夕陽会員の皆さまに心よりお礼申し上げます。



オープニングセレモニーでのテープカット

展示作業風景



談笑する来場者の方々

第3回 北海道教育大学夕陽会 「五稜郭 箱館奉行所」写生絵画展を終えて

さる9月10日(土)に「五稜郭 箱館奉行所」を対象とした写生会が実施されました。当日は函館市内の児童生徒54名と引率保護者、指導教員数名が集まり、9時頃から写生展が始まりました。素晴らしい晴天のもと気持ちよく描くことができたと思います。

「五稜郭 箱館奉行所」は、小中学生が描く対象としては、造形的な魅力を感じさせる建物と受け止めています。造りの隅々に歴史が見え隠れし、子どもたちは楽しく取り組み、2時間ほどの写生でしたが、黙々と集中して描く姿から、充実感も味わっていたと思います。

独特の様式なので、それぞれが工夫しながらの表現となり感性の広がりとともに、函館市のよさを知ることができ、夕陽会のもつ「地域への貢献」という視点で、大きな意義をもつ写生会だったのではないのでしょうか。

(文化部長 中村 吉秀)



作品は
11月8日～13日に
五稜郭タワー1階のアトリウムに展示されました。
また表彰式は、11月13日(日)
15時30分より、同アトリウムで行われ、入賞者全員に表彰状、金賞と特別賞には副賞が授与されました。



夕陽会長賞 深堀小学校 6年 北嶋 麻希



地域連携センター長賞 本通中学校 1年 大和 楓



金 賞 南本通小学校 3年 高村 尚志



金 賞 本通中学校 1年 藤倉 京香



檜山支部だより

檜山支部長 四辻 順一
(昭和49年卒 せたな町立久遠小学校長)

十月、朝夕に吹く風の冷たさが身に凍み、山の木々も色づき始めて秋の深まりを感じている今日この頃です。

今年度、檜山支部長を仰せつかりました。教職の最後の年を迎え、これも何かのご縁かと、支部役員の皆さんの協力をいただきながら、前年度よりも更に活発な活動をしていきたいと考えています。

平成二十三年度の檜山支部会員数は、現職会員数が百六十五名(期限付・時間講師等含)、OBが六十六名の計二百三十一名になります。檜山管内の現職教職員数が四百八十名程ですから、約三分の一が同窓になります。しかし、管内の学校数は、現在小中合わせて四十五校、小規模校が多くを占めていて、次年度は更に三校が閉校となるなど減少化が続いています。少子化の影響なのではないでしょうか、少々寂しさを感じています。

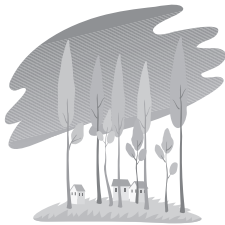
本年度の檜山夕陽会は、五月十四日の支会長・幹事長会議でスタートしました。活動方針や予算等について審議し、その後、引き続き支部歓迎会が本部幹事長代行(現幹事長)の奥崎敏之様を来賓に迎えて行われました。参加者は、新会員八名を含めて四十一名での歓迎会でしたが、そこは同窓、各テーブルではすぐに話に花が咲き、締めには寮歌と夕陽一色の賑やかな会となりました。

支部としての活動は、この後二月に開かれる支部総会・先輩を送る会の年二回行われます。その他に、各支会ごとに年一・二回、それぞれが総会・歓迎会や先輩を送る会を計画し会員の交流を図っています。年々会員数が減少していくのが悩みの種ですが、学校数の減少からやむを得ないのかもしれない。

ここ数年、支部や支会の集まりに若い会員が出席してくれるようになっていきます。参加するメンバーが管理職に偏ってきているのが少々気になっていましたので、これは嬉しい傾向です。若い先生方から、最近の大学の様子などを聞いたり、自分たちの学生時代のことを話したり、楽しい時間を過ごさせてもらっています。

今年度は、先ず支会での集まりへの参加者を増やす声かけと支部総会へのたくさんの参加を呼びかけ、先輩後輩が共に語り合える活動を考えています。

同窓の絆を強めるために、我々は、これからの夕陽会を担う若い先生方の良き相談役として、また、教職の先輩としての役割をしつかり果たさねばと気を引き締めています。



日高支部便り

日高支部長 小笠原 進
(昭和49年卒 日高町立富川小学校長)

昨年度より日高支部長を仰せつかり、二年目になりました。本部の会長橋田恭一様をはじめ、役員の皆様や会員の皆様、大先輩の皆様のご指導とご協力をいただきながら日高夕陽会の活動推進の一助になればと日々考えています。

日高支部では、総会を毎年「建国記念の日」と決め、「学習する夕陽会」、「行動する夕陽会」を基本方針に、会員相互の連帯意識を強めるよう取り組みを進めています。また、夕陽会の益々の充実・発展を図ることを運営方針に、夕陽会会員としての意識を高める啓発活動の推進と専門部活動、研修及び広報活動の充実による組織強化を進めています。

ところが、ここ日高にも北海道教育大学の改変が大きく影響し、新採用の教職員会員が、とうとう今年度は0という時代に突入してしまいました。さらに、支部内の町村合併や学校の統廃合により、会員の激減も続いています。かつて九つの支会を擁した日高でしたが、現在は六つの支会に再編しています。

そのような中、社教主事として各支会の教育委員会に採用される会員がいたり、若手教員や中堅教員を中心とした「若い会員の交流会」が定着してきたりしているのは喜ばしいことです。今後、日高の中核となる人材として成長していくもの

と期待しています。

今年度の主な活動を紹介します。

- 二月 総会・激励会・懇親会
 - 五月 支部歓迎会・懇親会
 - 六月 第一回学習会
 - 七月 第二回学習会
 - 八月 第三回学習会
 - 九月 若い会員の交流会・学習会
 - 一月 支会代表者会議
- ここに一つの作品を紹介します。

二人の大先輩が退職後もなお、その才能を認められ、旧静内町の町長に請われて平成十一年に作成したものです。

「シヤクシヤイン讃歌」

- 作詞 竹内 清 学Ⅱ27年卒
- 作曲 廣田 龍雄 学Ⅱ28年卒
- 一 シベチャリの流れ 真歌の丘に
展がる海原 潮なり 猛く
集いしコタンの長として アイヌの幸い願いつつ
北の大地に咆哮し 起てる
- ああ 英傑シヤクシヤイン その姿勇まし
無人の荒野 日高路深く
北の厳しさ 乗り越えて
はらからの絆いや固く 永久の暮らしの礎築く
ウタリ危機を救わんと 起てる
- ああ 英傑シヤクシヤイン その心美わし
未開の台地 蝦夷地の果てに
築きし文化の 心根深く
平和の誓 守らんと 民族の独立叫びつつ
悲運の運命乗り越えて 起てる
- ああ 英傑シヤクシヤイン その願い とわに

ご冥福をお祈りいたします

夕陽会顧問 細田辰男氏

函館市にご在住で昭和11年北海道函館師範学校第1部卒業の本会・顧問 細田辰男氏がご逝去されました。
細田氏におかれましては本会の発展のために多くのご支援を賜りました。
ここに、心より感謝と哀悼の意を表します。なお、ご本人のご経歴やお知り合いのお悔やみの言葉等は次号206号にて紹介させていただきますので、ご了承ください。

夕陽会員 訃報

三上 隆氏 昭28	函館市大森町14の5	22・10・2
小川 滋氏 昭31	函館市東川町4の6	22・12・18
岡崎 三郎氏 昭26	室蘭市本輪西町3の251の1	23・2・18
柴田 信雄氏 昭30	京極町字三崎218の30	23・3・30
坂本 友一氏 昭16	札幌市中央区南14西18の4の12	23・3・31
宮野 武矢氏 昭18	伊達市鹿島町58の42	23・6・11
内田 雄三氏 昭40	札幌市清田区里塚2の2の5の1	23・7・4
田村 憲雄氏 昭31	函館市日吉町4の22の10	23・7・6
高岡 松蔵氏 昭22	函館市宝来町6の10	23・7・8
中村(上田)渥子氏 昭34	函館市大川町13の13	23・7・10
辻田 昭氏 昭23	広尾町錦通北2の32の16	23・7・18
三国 亮氏 昭28	札幌市東区北31東6の3の27	23・7・24
牧 清氏 昭18	せたな町北檜山区北檜山269	23・8・4
佐藤 晴喜氏 昭22	札幌市白石区本郷通8南5の11	23・8・6
佐々木 謙藏氏 平7	函館市日吉町2の19の2	23・8・21
武藤 佳明氏 昭52	七飯町大川2の22の18	23・8・28
浅野 健氏 昭41	札幌市南区石山2の5の7の15	23・8・28
鈴木 達也氏 昭36	苫小牧市豊川町3の19の15	23・8・28
野村(中井)美恵子氏 昭42	函館市大森町10の15	23・8・31
古谷 宏氏 昭24	函館市人見町5の51	23・9・1
浅井(長谷川)庸子氏 昭48	函館市陣川2の15の8	23・9・28
成田弓規子氏 昭39	函館市時任町20の12	23・10・18
佐藤 利彦氏 昭22	仙台市泉区高森1の1の320の303	23・10・28
細田 辰男氏 昭11	函館市五稜郭町41の9	23・10・31
千葉 貫一氏 昭15	函館市亀田本町12の14	23・12・1
高橋 豊氏 昭29	札幌市北区新琴似6の9の1の16	23・12・5
佐智子氏	佐智子氏	

※三上隆氏の喪主様のお名前はご遺族の希望により掲載しませんでした。

(平成二十三年十一月十日現在)

編集後記

◆会報第二〇五号をお届けいたします。今回も、皆様から多くの玉稿や貴重な写真等をお寄せいただきました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。
◆今号の表紙は、十月一日にオープンした函館市の新名所、南茅部地区の『函館市縄文文化交流センター』の写真です。遙かに時空を越えて、古代縄文の時代に心遊ばせるのはいかがでしょうか。ぜひ一度は訪れたいものです。
◆三・一一の東日本大震災より、はや九か月になろうとしています。今号には、宮城支部から「復興・始まりと終わりの見えない不安」というタイトルで原稿をいただきました。また、夕陽会会員の善意の震災義援金に対するお礼のお手紙も掲載させていただきました。あらためて夕陽会員の絆の強さを実感させられるとともに、まだまだ復興まで長い時間を要する東北地方への物心両面の息の長い支援の必要性を感じています。
◆秋の叙叙等でも今回も十名の皆様がその功績を認められ、様々な分野での賞(章)をお受けになりました。まことにめでたくございます。原稿締め切り等で、掲載できない分につきましては、また次号にてお知らせいたします。
◆ぜひ掲載してほしい情報・取材してほしい題材等、どしどし本部事務局や情宣部にお寄せください。お待ちしております。(情宣部長 古川 邦彦 記 昭56卒)

本部事務局へのご連絡などは、次の所へお願いいたします。

041-0806 函館市美原3丁目48番6号

北海道教育大学附属函館小学校内

夕陽会本部事務局

電話番号(01138) 46-2235

夕陽会専用(01138) 34-5520

FAX番号(01138) 47-7376

題字 文化勲章受章者 金子賢蔵(鷗亭)氏(昭4卒)